

美しいばかりでない、  
人と自然のありようが  
あふれ出す。

## 牟田陽日

自然礼賛の思想を基にした風景や  
縁起物を描いた器



フ  
 アインアートと工芸との境界は、  
 どこにあるのでしょうか。ロンドン  
 大学ゴールドスミスカレッジのファイ  
 ンアート科を卒業した牟田陽日さんは、  
 伝統的な九谷焼や日本美術の要素を取り  
 入れつつ、現代の視点からやわらかな感  
 覚で色絵磁器を制作しています。それら  
 すべてに共通するのは、作家の精神性が  
 響く、心地よい緊張感を持っていること。  
 自然への畏怖、崇敬、欲望。歴史の中で  
 人が自然をどのようにとらえてきたのか  
 を見つめ、流れるように変化し続ける作  
 品は多くの人を魅了しています。

牟田さんはロンドン留学中、様々な素  
 材を用いた立体作品・映像・インスタレ  
 ションなどの制作をおこなっていました。  
 コンテンポラリーアートでは、コン  
 セプトと素材が乖離していないか、作品  
 表現に適した媒体であるかを追求される  
 ことが多かったといいます。しかし、作  
 られた作品の多くが展示後に解体される  
 ことに違和感を持ち始め、やがて制作に  
 より大量の廃棄物が出ることに對する自

1 / 《eclipse》2020年 「日食」を意味するタイトル。  
 海から踊りあがった鯨が太陽を呑み込むばかりの迫力  
 で描かれています。 2 / 《祥瑞蛸鳥賊海中図 酒器  
 揃え》2020年 まるで徳利やぐい呑の中に蛸や鳥賊  
 が潜んでいるような動きのある図案。面白みのある形  
 と絵の融合が、お酒に合う最高のご馳走です。 3 / 《墨  
 祥瑞白波蟹図茶碗》2020年 月を掴み取ろうとす  
 るかのような蟹。散りばめられた貝や珊瑚が宝のよう  
 に海を彩ります。 4 / 自宅の工房で作品に絵付けす  
 る牟田さん。後ろの棚にはガラス板と練り棒によって  
 練られた多種多様な絵の具。

身の葛藤に気づきました。よりクラシッ  
 クな素材を模索する中で転機となったの  
 は、知り合いから贈られた九谷焼の急  
 須。全面に絵付けが施された、過剰とも  
 言える装飾性と野生味のある派手さが目  
 を引き、当時興味のあつたアーツアンド  
 クラフトの過密な装飾などのイメージと  
 重なったのだそうです。

帰国後、牟田さんは石川県の九谷焼技  
 術研究所に入り、九谷焼の技術や歴史を

一から学びました。彼女の作品は躍動感  
 のある鮮やかな色絵が目立ちますが、  
 実は陶を素材として選んだころは、絵を  
 描くことよりも造形に深い興味があつた  
 とのこと。確かに彼女の手に捻りによる造  
 形は、手をかける場所を使い手に考えさ  
 せるようなものもありますが、扱いにく  
 いわけではありません。土の起伏や表  
 面に盛り上げられた釉薬の凹凸までも、  
 しつくりくる場所に落ち着くように計算

